



—昭和大学歯科病院の理念—

患者本位の医療  
先進医療の推進  
良き歯科医師の育成

発行責任者 病院長 岡野 友宏  
編集責任者 広報委員長 高橋 浩二  
〒145-8515 東京都大田区北千束2-1-1  
TEL 03-3787-1151(代表)

ホームページ: <http://www10.showa-u.ac.jp/~denthp/index.html>

## 高齢化社会は終わり、超高齢化社会は来ない？

高齢者歯科 科長 佐藤 裕二

日本の高齢化率(65歳以上の割合)は昨年秋の段階で22.7%であり、年に0.5%ずつ増加しています。高齢化率が7%以上を「高齢化社会Aging Society」、高齢化率が14%以上を「高齢社会Aged Society」といいます。国際連合が1982年に高齢者問題世界大会を開いた際に作られたものです。その当時は日本の高齢化率は10%程度であり、欧米先進国でも15%程度でした。したがって、高齢化がさらに進んだ社会の定義は不要でした。「超高齢社会Ultra-aged Society」は20%または21%以上と一般にいいますが、厳密な定義はされていません。しかし、「超高齢[化]社会Ultra-aging Society」という言葉は、うまく高齢化社会と高齢社会につづくものとは考えられません。したがって、表題のように、「超高齢化社会」は来ないのです。

現在、多くのマスコミが用語を間違えています。「高齢化社会の日本では・・・」「超高齢化社会を迎えるにあたり・・・」など、多くの誤用がみられます。ちなみに、インターネットで検索すると、「超高齢化社会」という誤用が約873万件出てきます(NHKのサイト内検索で70件、朝日新聞13件)。正しい用法である「超高齢社会」の約2000万件(NHKのサイト内検索で84件、朝日新聞7件)に匹敵しています。また、現在を「高齢化社会」としている記事は多数見受けられます。

言葉の定義が違っていると、スムーズなコミュニケーションを行うことは困難です。今後の超高齢社会にどのように対応するかについての検討に際して、大きな障害になるものと思われれます。このよ

うな事態に至ったのは、高齢者に関する学問を行っているわたしたちの責任も大きいと考えます。今後、マスコミを通じて、国民全体が共通認識を持つことが重要です。

一方、この高齢化率が増加することにおびえるだけではいけません。高齢者の定義は65歳以上とされていますが、高齢者は本当にいわゆる老人なのでしょうか？高齢者は前期高齢者(75歳未満)と後期高齢者(75歳以上)の2つの段階に分けられています。前期高齢者では要介護の割合が3-4%であるのに対し、後期高齢者では10%以上になります。したがって、高齢者の定義自体も考え直す必要があります。高齢者を「世話を受けるべき人」として考えるのではなく、高齢者が年齢にとらわれず自由に生き生きと活躍し、社会に貢献できるようにすることがもっとも重要であると考えます。

ただし、65歳以上の方は、一見お元気に見えても、潜在的に病気を抱えていらっしゃる場合が多いのも事実です。当病院の高齢者歯科では、このような潜在的な病気の存在を考えた上での治療を行うことをモットーにしています。安心・安全な歯科治療を通じて、健やかな人生に貢献するために頑張っています。「高齢者歯科なんて、年寄り扱いするな」なんておっしゃらないください。



## 高齢者歯科 紹介

高齢者歯科は65歳以上の有病者、70歳以上の患者さんを対象に治療を行っております。1日約50人、年間では延べ13,000人以上の患者さんが当科を受診されています。近年、高血圧、糖尿病、脳血管障害、心臓病など、様々な病気を抱えた患者さんが増加しています。当科ではそのような慢性疾患をお持ちの患者さんも大学病院の高齢者歯科として、総合内科をはじめとした他診療科との連携のもとで治療させていただいております。また、難症例の義歯製作、インプラント(人工歯根)治療、口腔乾燥(ドライマウス)治療も行っています。全人口の占める高齢者(65歳以上)の割合は20%を超えました。その中で当科に寄せられる期待は、確実に高まっています。お口の健康の回復・増進によって患者さんの日常生活の質(QOL)を向上させていただくために、医局員一同がんばっています。

当科は1977年4月の昭和大学歯学部創設と同時に第二歯科補綴学教室(総入れ歯)として開設されました。その後2001年4月(平成13年)高齢

者歯科学教室に名称を変更し、2002年4月(平成14年)現教授の佐藤裕二が広島大より主任教授として着任し現在に至っております。当教室のコンセプトは「まずは立派な臨床家であること」です。知識だけではなくそれを柔軟に使えるコツを臨床の中から見つけ出し、自分で解決できる歯科医師の育成を目指しております。主任教授を中心に、23名のスタッフで診療、教育、研究に努力しています。何でもご遠慮なくご相談下さい。

(高齢者歯科 科長 佐藤 裕二)



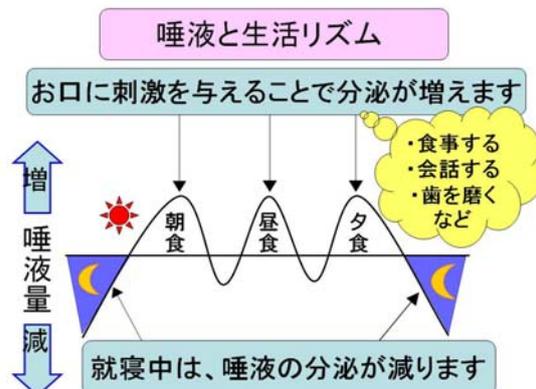
## 歯の衛生週間について(6月4日～6月10日)

毎年、歯の衛生週間には歯科衛生士室で作成した、お口の健康維持のための情報を1階総合受付・エントランスホールにおいて配信しています。

今年度は「唾液について」をテーマとして「唾液の分泌」や「働き」「生活リズムとの関係」などについて取り上げました。以下にポスターの内容の一部をご紹介します。

なおポスターの内容はリーフレットとして健康フェスティバルで配布する予定です。

唾液はお口の中で、どんな働きをするのでしょうか？



お口の健康を保つためには、よく噛みバランスの取れた食事をすることや、毎日のブラッシングを習慣化することが大切です。また、専門家による定期的なケアを受けることが望ましいです。

詳しくは、歯科医師・歯科衛生士にご相談下さい。

歯科衛生士室 士長 日山 邦枝

歯の治療の際には局所麻酔がよく使われますが、患者さんにとっては、「針を刺す痛み」「緊張で心臓がドキドキする」「アレルギーに対する不安」などがあり、あまり気分の良いものではありません。

しかし局所麻酔も進化を遂げています。現状と未来に向けての展望をお話します。

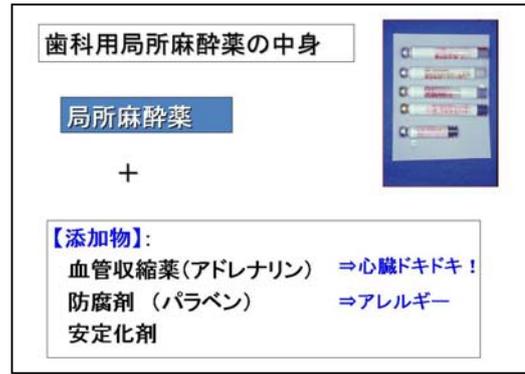
局所麻酔は麻薬であるコカインがそのルーツです。最初は表面麻酔という粘膜に塗って痛みをとる方法で使われました。(注射器が発明される以前のことで、すから当然といえば当然です。)

コカインの組成が研究されて、20世紀初頭に「プロカイン®」(エステル型麻酔薬)が創りだされました。麻酔の歴史上画期的なことで、以後注射による局所麻酔が広く使われるようになりました。しかしアレルギー反応の起きる頻度が高いのがエステル型の大きな欠点でした。今でも『局所麻酔＝アレルギーが怖い』と思われるのはこの頃の影響です。

現在は、エステル型とは別種類のアミド型が主流となり、日本において歯科用では「リドカイン(キシロカイン®)」が最もよく使われています。キシロカイン®をはじめとするアミド型の局所麻酔薬には、アレルギーなどの有害な作用はまずありません。しかし実際には、注射後にアレルギーがみられたり気分が悪くなることがあります。なぜでしょうか？



歯の治療で痛みを感じる神経は歯の中にある歯髄ですが、周りを歯と骨でガードされているために、リドカインのみの注射では確実な麻酔効果は得られません。歯科用の「キシロカイン®カートリッジ(CT)」には麻酔効果を高める目的で「血管収縮薬: アドレナリン」が混合されています。アドレナリンの添加により歯髄への麻酔効果は飛躍的に高まりますが、心臓をやや刺激する効果があるため、麻酔後に心臓がドキドキするのを感じたり、実際に血圧が一時的に上がることもあり、患者さんによっては気分不快の原因になります。



また品質保持のために最近まで「保存剤: パラベン」が添加されていました。このパラベンは食品の保存剤として広く使われていますが、局所麻酔のアレルギーの原因はこのパラベンによると考えられており、ある事故をきっかけに、数年前からパラベンを含まない「キシロカイン®CT」に切り替わりました。

この他に「スキャンドネスト®CT」という他の薬剤の混合がなく添加物を全く含まない局所麻酔薬が登場しました。麻酔が効いている時間が30分程度と短いので、すべての歯科治療に適しているわけではありませんが、アレルギー体質の患者さんには現在最も推奨できる麻酔薬です。

インプラントの手術などで長時間麻酔が効いてほしい場合に有効なのが「アナペイン®」です。本来医科用で、まだ歯科治療での適応がないのが残念なところです。

歯科用局所麻酔剤の選択

短時間処置(～30分)	スキャンドネストCT
中間時間処置(～60分)	歯科用キシロカインCT 歯科用シタネストCT
長時間処置(～90分)	アナペイン(医科用)

◎2剤の登場により、選択肢が増えた

以前はキシロカイン®CTのみが使われていましたが、これらの局所麻酔薬が登場したおかげで選択肢が広がりました。

表面麻酔で歯の治療ができれば、あの嫌な注射も不要です。皮膚に貼るだけで、点滴や採血の時に無痛が得られる表面麻酔薬はすでに存在します。現在使用されている歯ぐきに塗る表面麻酔では、歯髄にまで麻酔効果が及びませんが、歯周ポケットに液体を流し込むと固まってかなり深い部位まで麻酔効果が得られる新しいタイプの麻酔薬の研究も進められています。

近い将来、表面麻酔だけで確実に痛みがなくなり、すべての歯科治療が無痛でできる日が来るのが待たれますね。

## ろう学校の高校生が本院を見学

5月10日に東京都立中央ろう学校の高校一年生15人が本院に見学に来ました。今回の見学は、ろう者の社会的な立場を支援する一環として、昭和大学病院で薬剤師をされている早瀬久美先生案内のもと行われました。なお、昭和大学ではろう者の支援を積極的に展開し、ゴールデンウィーク初日の4月29日には「手話研究シンポジウム2010in東京」が昭和大学上條講堂で開催されております。

今回歯科病院に見学に来た学生達の中には将来医療従事者をめざす子供達もおり、目を輝かせてまた来年も見学したいですと強く意思表示する場面もあり、たいへん有意義な時間になりました。

岡野院長をはじめ、多くの方々のご協力に心から感謝いたします。 歯内療法科 大学院生 鈴木 重紀

## 天津医科大学口腔医院のスタッフが本院を訪問

本学歯学部が連携している中国・天津医学院口腔医院の方々が入日され、5月11日午後、本院を見学されました。今回の訪問は2度目で、麻酔科のShen教授を除くと病院の管理部門の方々を中心となり、各診療科の他、病棟や手術室の管理や病院の物品管理などを見学しました。本学からは学生が天津口腔医院を訪問して学生間での交流を図っており、また天津からは教員が専門診療科での研修のために来日しています。今後はさらなる人的交流が図られ、相互の発展に寄与するものと思われま



前列中央に岡野院長、向かって右が天津口腔医院代表Fei Jin-Gui書記、左がShen Dai教授、後列左端が石川看護師長、右の4名が看護部、感染予防部、教育研究部、管理部の各代表の方々。

(岡野院長談)

## 健口フェスティバルのおしらせ

今年度は、7月10日(土)に健口フェスティバルを開催することとなりました。

病院及び職員の協力のもと、公開講座・院内コンサート・健口体操・技工体験など、楽しくそしてためになるイベントを企画しておりますので、地域の皆様方をはじめ、たくさんの方々のご来場をお待ちしております。

第13回 昭和大学歯科病院 公開講座 暮らしと健康 ～健康と若さは口元から～

総司会／井上 美津子(昭和大学歯学部小児成育歯科学教授)

- ① アンチエイジングは口元から 昭和大学歯学部教授(美容歯科) 真鍋 厚史
- ② お口の健康を保つには 昭和大学歯科病院歯科衛生士 柴田 由美
- ③ 歯科衛生士による健口体操

7月10日(土) PM1:00 ～ 3:00 昭和大学歯科病院 6階 臨床講堂

(管理課)

## 編集後記

長かった寒い春もようやく終わり、五月晴れの今日この頃ですが、皆様お変わりありませんか。ゴールデンウィークはいかがお過ごしでしたか。自分のことで恐縮ですが、私は加齢現象ともいえる左足の循環障害と炎症のため昭和大学救急センターで3日間お世話になりました。初日は8時間も医師、コメディカルの方々にお世話になり、休日体制の救急医療の現状をどっぷりと経験できました。

結論として早期受診、早期治療がいかに大切か今更ながら身にしみてわかりました。歯科病院の患者様、う蝕も歯周病も早期受診、早期治療が大切です。治療が終わったあとともどうぞ定期受診をお忘れなく。

(K.T)